

大黒柱がどっしり構え、太い梁が風格を漂わせる古民家。栃木県の木材を生かし、伝統の住文化を守り、山林や山里の環境を受け継ぐと取り組む。思いを聞いた。

# 木の住文化 守り受け継ぐ

県古民家再生協会理事長 鈴木 健規さん(38)

——古民家に目を向けるきっかけは

自然の中で育った木は年々強さを増し、戦前の日本では何世代にもわたって再利用されてきました。以前から、素晴らしい建物を壊し、生きている古材が無造作に処分されるのが心にひっかかってきました。それらが私たち建築会社の使命なのか、と。

時とともに美しさを増し、ヴィンテージとも言える木の家を残したいと強く思うようになりました。築50年を超え、柱や梁などの木造軸組で支える在来工法の古民家を文化としてとらえ、保存や再生、鑑定に取り組んでいます。

——建て替えサイクルは50年より早いのですか

住宅業界では、平均すると



築25年で解体と言われている。木は本来、切つてから100〜130年くらいが一番強くなるんです。そのため3年ほど自然乾燥させる必要があります。しかし、今は釜に入れて乾かす強制乾燥材や工業製品である集成材を使う家が多くなり、自然に乾燥させた木よりも早く弱くなつてしまいます。

国産材使わず山荒廃

——木材需要は低迷しています

花粉症の季節ですが、スギは50〜80年ほどで建築資材になります。花粉が飛ぶのは成熟したから。「切つていいよ」という合図なんです。木材が使われなくなり、人手不足で山の木は手入れされな

すずき・たけのり 1978年、那須塩原市生まれ。黒磯南高校を卒業後、宇都宮日建工科専門学校で学び、大工として経験を積む。2001年に住宅建築やリフォームのユーディーホーム、10年に県古民家再生協会を那須塩原市鍋掛に設立した。今年、さくら市氏家の築88年の古民家を建具や柱、梁をそのまま生かして再生させた取り組みで、一般社団法人住まい教育推進協会(東京)主催の「再築大賞」で古民家再築部門賞を受賞した。

い。日が当たらず、動物はエサがなくなり、人里で農作物を食べてしまう。夏でも日陰がちになり、雨が降ると土砂崩れも起きやすい。

高度経済成長期、スギやヒノキなどをいっぱい植え、住宅に使おうとした。しかし、外国から安い木が入ってきて、国内の木は使われなくなつてしまいました。

——悪循環です

再利用せず、国産材を使わず、山を放置する。「持続可能な社会」とはほど遠く、取

り返しのつかない状況になりつつあります。林業が衰退した一番の原因は、国産材を使わない住宅業界にあります。栃木県の木は寒い環境でじっくりと育ち、年輪の間隔が詰まっていて強度がある。見栄えもいい。良質な木材を、地元消費者にどう使ってもらうかを真剣に考えなければなりません。

## 高い技術の職人必要

——どう行動しますか

おじいちゃん、おばあちゃんが残したいと思っても、子どもたちが「いらぬ」と言えは話が進みません。私たちは工事に入る前に、半年、1年をかけて「残すことは負の遺産ではない」と丁寧に説明しています。

古民家を残すには高い技術の職人も必要です。工務店などの協力を得ながら、伝統的な建物の再生を経験してもらうことで育成したい。素晴らしい日本の住文化を受け継いでいくため、様々な分野の人たちと連携していきたいと考えています。

(聞き手・坂田達郎)